

シリーズ「発達に違いのある子どもたち」

市では、「障がいのある人、ない人にかかわらず だれもがいいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組まれているNPO法人「まいすてつぷ」から、発達に違いのある子どもたちについて市民の皆さんに正しく理解いただくために、文章を寄稿していただきました。

問合せ先 福祉課福祉政策係 ☎21111 (内線2814)

『発達性読み書き障がい（発達性ディスレクシア）』（前編）

最近「学習障がい」「読字障がい（ディスレクシア）」などの言葉がメディアでもよく取り上げられ、耳にするようになりまし。俳優のトム・クルーズ氏やキアヌ・リーブス氏、映画監督のスティーブン・スピルバーグ氏のように、自分がディスレクシアであることを告白する著名人も増えてきました。

日本では、前文部科学大臣の下村氏が、息子さんがディスレクシアであることに気づき、特別支援教育の先進国であるイギリスにわずか11歳で留学をさせたということを、あしなが育英会の機関紙に語っています。また、2月3日に放送された「ザ！世界仰天ニュース」の「字が読めない子どもたちの苦悩スペシャル」では、明蓬館高等学校共育コーディネーター南雲明彦さんの、21歳で自分がディスレクシアだと知るまでの壮絶な人生が紹介されました。ディスレクシアという言葉

を直訳すると、「読字障がい」「難読症」ですが、字を読むことが困難な場合、書くことの困難も伴うので、日本では、生まれつき読み書きが困難な症状を「発達性読み書き障がい（発達性ディスレクシア）」と言っています。発達性読み書き障がいは学習障がいの一種であり、文字と音との対応関係が影響するため、ひとつの文字にいくつもの読み方があるアルファベットを使う英語圏では日本より出現率が高く、人口の約10%の出現率と言われています。アメリカやイギリスでは、日本より30年も前から特別な支援が行われており、発達性読み書き障がいであっても高校・大学へ進学し配慮ある環境で学ぶことができます。

発達性読み書き障がいの子どもに気づくにつまずか

日本では、平成24年12月に文部科学省でまとめられた調査結果で、「通常学級に在籍する、知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で困難を示し、特別な教育的

支援を必要とする児童生徒の数は、全体の約6・5%を占める」と発表されました。6・5%の多くは学習障がいと言われており、簡単に言えば「通常の教室に支援を必要とする児童生徒が2人いる」こととなります。

発達性読み書き障がいの症状は、一人ひとり違います。文章の音読・黙読ができ文章を書くことができる年齢になっても、なめらかに音読できない、文字一つひとつは読めるがたどたどしく読むのに時間がかかる、わからない文字の飛ばし読みをする、内容を推測して勝手読みをする、正しい文字が書けない、文字を書くのに時間がかかるなどがみられます。書かれています。文字の意味を瞬時にイメージできないため、教科書など長い文章が書かれたものを読むと、音読と理解に通常の何倍も時間がかかってしまいます。

日本では、このような子どもたちに対する理解は十分には浸透しておらず、発達性読み書き障がいの子どもたちの困惑に気づき、正しく評価し支援できる環境は少ないと思

います。見た目には気づかれにくいこと、また、読み書き以外は優秀な子どもも多く存在するため、多くの場合は「努力不足」とみなされ、もっと頑張ることを求められているでしょう。しかし、通常の学習方法や繰り返しというだけでは、学習成果が身につかないのが「障がい」です。なぜ、周りの子はできるのか、なぜ自分だけできないのか、誰に助けを求めているのか、ことばにも表情にも出せず一人悩んでいる子どもが、身近なところにもいるかもしれません。今回は、読み書き困難の原因や具体的な支援の方法にふれていきたいと思います。

参考文献

「ディスレクシア（発達性読み書き障害）」とは？（ベネッセ教育情報サイト）、あしなが育英会機関紙（あしながファミリー）、日本語教育実践研究第2号 ディスレクシアを抱える日本語学習者に対する読み学習支援に関する一考察（池田伸子・立教大学）